

犠牲と責任

—「原発責任」再考—

高木哲也

一、はじめに

東日本大震災から、四年が経過した。この間、政府は「戦争できる強い国」づくりを目指し、新自由主義を推し進めるなかで、あの福島「原発震災」を忘れたかの様に振る舞っている。だが、原発問題に触れる事なしに「この国のかたち」を論ずる事は出来ない。

私は、本誌第一八号(二〇一一年)で、「現代の超克—「原発責任」への一考察—」と題して原発問題を論じた。その中で「将来への危険を放置して、現在の豊かさのみを享受する『現代』という時代は『超克』されねばならない」という観点から、「原発責任」への考察を行った。しかし、その考察は未だ十分なものであったとは言えない。そこで、ここに改めて「原発責任」問題を論じ、現代に生きる私たちが原発とどのように向き合うべきなのかを考えてみる。

二、「犠牲のシステム」

高橋哲哉は、現在の原発の構造を「犠牲のシステム」と名付け、以下のように論じている。

少なくとも言えるのは、原発が犠牲のシステムである、ということである。そこには犠牲にする者と、犠牲にされるものがある(原発の場合、前者は人間だが、後者は人間だけではない)。(中略) 犠牲のシステムでは、或る者(たち)の利益が、他の者(たち)の生活(生命、健康、日常、財産、尊厳、希望等々)を犠牲にして生み出され、維持される。犠牲にする者の利益は、犠牲にされるものの犠牲なしには生み出されない、維持されない。この犠牲は、通常、隠されているか、共同体(国家、国民、社会、企業等々)にとつての「貴い犠牲」として美

化され、正当化されている。そして、隠蔽や正当化が困難になり、犠牲の不当性が告発されても、犠牲にする者（たち）は自らの責任を否認し、責任から逃亡する。この国の犠牲のシステムは、「無責任の体系（丸山眞男）」を含んで存立するのだ（高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖繩』集英社新書、二〇一二年、二七～二八頁）

現在、福島第一・第二原発内で危険な任務に当たっている作業員の約八割は、地元出身者であるという（作業員の健康状況を診断した医師の証言）。原発事故の被災者自身が、事故収束のため過酷な末端労働を担わされているのである。彼らを「決死隊」と呼んだり、「フクシマ五〇」と呼んで英雄視する報道もある。（中略）災厄に襲われた社会が、自らの罪から逃れるために、力弱い山羊に全責任を押しつけて、犠牲に捧げる。そうしておいて社会は、山羊を自分たちの救い手として崇め奉るのである。（中略）日常的にも危機においても、原発はその内部に被曝労働者の犠牲を必要とする。いったん大事故が起これば、まず地元とその周辺の人々と環境が、そして放射性物質の拡散によって、県境や国境も越えて広大な地域の人々と環境が犠牲とされる。原発とはそのような犠牲のシステムなのである

（同書、三六～三八頁）

原発事故において、大量被曝を覚悟しながら働かざるをえない人々を英霊予備軍としてたたえることは、自分たちは安全な場所において彼らの犠牲から利益を引き出す人々の責任を見えなくしてしまふ。彼らの犠牲から利益を引き出す人々とは、まず第一に、電力会社や原発関連企業の幹部たち、中央政府の政治家・官僚たち、原子力委員会、原子力安全委員会などに名を連ねる学者・専門家たち、要するに、この事故の収束に最大の責任を負う人々である。（中略）確認しよう。事故に際して破局を防ぐためには、だれかが被曝労働者の犠牲を担わなければならないというのが原発というシステムなのだ（同書、六二～六三頁）

この高橋の論において、原発における「犠牲のシステム」は、以下のように要約できるだろう。

- ① 原発による利益を受ける者（たち）は、「他の者（たち）の生活」を犠牲にして生み出され、維持される。
- ② 日常的にも危機においても、原発はその内部に被曝労働者の犠牲

を必要とする。

③犠牲の不当性が告発されても、犠牲にする者(たち)は自らの責任を否認し、責任から逃亡する。

本稿では、この三点について、さらに詳しく考察を行いたい。

三、自らは安全な場所において、他者の犠牲を必要とする構造

まずは、前述の①に関して。このような構造は、往々にして「植民地主義」と名付けられる。「自らは安全な場所にながら、あたかも『植民地』から搾取するが如き構造で利益を得る」、「危ないモノは、自らから遠く離れた『植民地』に押しつける」というシステムがこの国に存在する。この例としては、誰しもが気づくように、「原発立地の差別」をまず挙げることができよう。例えば小出裕章は次のように述べている。

人口密集地には(原発は、引用者)一基も作られていません。

これは「原子炉立地審査指針」に、人が住んでいない、ないしは低人口地帯に建てることと定められているからです。ここに

私は、許しがたい差別があると思います。(中略)都会の快適な生活のために過疎地に原発を押し付け、あげくの果てに福島の人々はふるさとや家、家族団らんを失い、地元を支えた農・漁業などの産業すら奪われかねない状況になっています。この許しがたい不公平、不公正は福島の人々だけでなく、原発のあるすべての地域の人々に向けられたものです(小出裕章『この国は原発事故から何を学んだのか』幻冬舎ルネッサンス新書、二〇一二年、三八〜三九頁)

このような小出の主張に対して「原発立地住民は莫大な補助金を受けて潤っているではないか」という反論が予想できる。しかし、それに対して高橋は前掲書で以下のように反駁している。

(原発が立地する地域住民は多額の補助金を交付され恩恵を受けてきたではないかという論を受けて、引用者)補助金も何も地元にとっては「安全」が前提であって、その前提なしに原発を受け入れる住民は存在しない。大事故と補助金との「等価交換」など成り立ってはいないのである(高橋、前掲書、三三頁)

「ここで高橋が言うように「大事故と補助金との『等価交換』」は決して成り立たない。しかし、私たちは安易に「立地住民は多額の補助金を受けているではないか」と考えがちだ。原発の安全神話が崩壊したいま、小手先の補助金によって「植民地」に危険な原発を立地させようとする考え方そのものを私たちは見直さなくてはならない。

ところで、「危険なモノは自らの外部に押しつけよう」とする「植民地主義」的な発想は国外に対しても行われてきた。ここでは次の二つの例を示したい。

★日本のウラン残土をアメリカ先住民居住区へ棄てた

日本の最高裁で人形峠のウラン残土撤去命令が確定するや（二〇〇四年十月、引用者）、動燃は、ウラン濃度の高い残土290㎡を日本国内のどこにも持ち出すことができず、アメリカ先住民の土地に棄てるという選択をしました（二〇〇五年八月〜九月に搬出、引用者注）。米国のユタ州ホワイトメサ。ここはナボハ族、ホビ族などアメリカ大陸の先住民が白人から虐殺や迫害を受けながら「居住区」に押し込められた土地です。ウランが発見され先住民がウラン鉱山の労働力として狩りだされ甚大な被曝を強いられたこの地にホワイトメサ精錬所が

あります。（中略）日本で原子力発電を行って電気を起こし、そのツケをアメリカの先住民に押し付けた訳です（小出裕章『原発ゼロ社会へ―ぜんぶなくす―』エイシア出版、二〇一二年、二四八〜二四九頁）

★放射性廃棄物をモンゴルに押し付けようとした

三・一一後の五月九日、毎日新聞等が驚くべき事実を報道した。日本の経済産業省が昨年から米国エネルギー省と共同で放射性廃棄物の国際的な貯蔵・処分施設をモンゴルに建設する計画を極秘に進めていた、というのだ。原発建設の技術供与と引き換えに、危険な「核のゴミ」を押しつけてしまおうというのだろうか。（中略）これは植民地主義というべきものではないだろうか。原発は国内においても、中央が周辺、地方、辺境を犠牲にして利益を得るといふ一種の植民地支配システムになぞらえるが、ここでは国際的な貯蔵・処分施設を共同利用する日本、米国、その他の原発先進国が、モンゴルに対して植民地支配を行なうようなかたちになっているのではないか。その後の報道によると、七月二十七日、松本剛明外務大臣は、モンゴル政府が核廃棄物の受け入れを断ってきたことを明らかにした。そうは問屋がおろさなかつた、ということだろう（高橋、

私たちは、自らの繁栄をのみ享受し、「他者の痛み」に対して余りにも鈍感になり過ぎてはいないか。「他者の犠牲」に対して余りにも無頓着になり過ぎてはいないか。

四、被曝労働者の犠牲を不可欠とする構造

次に、前述の②に関して。原発は、その通常運転すら、既に被曝労働者の犠牲の上にはじめて成り立つという構造を持つ。このような事実を知らずして原発の是非を論じることが余りにも無責任である。以下に、原発労働者の悲惨な現状を告発する文章をいくつか挙げる。

近代科学・技術の最先端をいくといわれている原発だが、それはいつても実際に原発を動かしているのは人間なのだ。それも、中央操作室で計器類を監視し、スイッチを押す電力会社社員は、そのほんの一部であって、人数面からも仕事量からも、下請労働者の方が圧倒的に多い。つまり、原発は、下請労働者の存在があってはじめて原発として稼働することが可能な

である。言いかえれば、現場の最前線に送りこまれ、放射能にまみれて働くことを強いられている労働者たちの姿を無視して原発を語ることはできない、ということなのだ。似たような例を私たちは、いわゆる「戦記」に見ることができ。 (中略)

戦争の本性は、一兵卒の体験のなかにこそ存在しているのではないだろうか。(中略) 社会的に生み出された下請労働力を積極的に取り込み、利用し終えると「棄民」化するという構造は、原発だけでなくコンビナート等もまた同様のものをもっている。だが、原発とコンビナートとは決定的な相違点の一つある。それは、原発が吐き出す「棄民」は、放射能をたっぷりと浴びた「被ばく者」となっていることだ。原発内の労働が、作業量ではなく、放射能を浴びることがノルマになっているという事実からすれば、労働者を「被ばく者」とすることは、むしろ前提条件でさえあるのだ。こうしてみえてくると、原発には、他の産業とは比較にならぬほど露骨に資本や国家権力の「論理」が投影されているように私には思えてならない(堀江邦夫「原発ジブシー」現代書館、一九七九年、三二四～三二七頁)

釜ヶ崎(大阪の「あいりん地区」の通称で知られるドヤ街がある、引用者)で職を求める男性に対し「宮城県女川市でのダ

ンブ運転手の求人」と偽り、福島第一原発の作業員として働かせた業者の存在が5月に報じられました。身元もはっきりしないなど、立場の弱い日雇労働者に狙いをつけた「協力会社」も悪質ですが、その存在を前提に原発を動かしているのがまさに電力会社なのです。(中略) 原発は、下請労働者の存在があつてはじめて稼働できる装置です。原子力の場合、あらゆる所で弱い人々に犠牲を強いながら成り立っているという事実を知つて頂きたいと思います(小出 前掲『原発ゼロ社会へーぜんぶなくすー』二五〇～二五一頁)

これまで日本の原発で生じた被曝の九六パーセントは、下請け労働者が背負わされてきました。今まさに福島第一原発では、事故収束のための被曝作業が続いています。被曝を受け持つているのは下請け、孫請け……七次、八次と続く請負体制の最下層の労働者たちなのです(小出、前掲『この国は原発事故から何を学んだのか』二二二頁)

危険な作業に従事しているのは下請け、孫請けの会社が集めてきた人たちであり、仕事ができなくなれば、首を切られてしまいます。そして、一〇〇ミリシーベルト以上の被曝をしてし

まえば、その後、五年間は原発を含め、放射能を取り扱う現場での仕事を得られなくなつてしまいます。普通、労働者は自分が持っている才能や技能などを売つて給料を得ますが、原発労働者の場合には、「被曝する能力」を売っているのです(小出、同書、一三八頁)

(原発労働者の、引用者)被曝量が多ければ一日の実労働時間が二〇分、三〇分といった短時間にならざるを得ない場合もあり、労働というよりも、生命を削る被曝に対して賃金が支払われている観を呈する。また、特に技術も要しない雑作業に就き「楽して稼げる」と感じる周辺住民は、原発反対の人たちと対立することになる。さらに、除染や廃棄物の運搬、配管の錆び取りといった雑作業では労働を通じて技術を身に付けることはなく、達成感もほとんどない。にもかかわらず、確実に放射能を浴びるのである。原子力発電所の安全性という根本問題を別としても、原発における反人倫的な被曝労働の実態を知りながら、それでも原子力発電を続けるのか、と問わざるを得ない(萬井隆令「原発における被曝労働と間接雇用の「活用」」—それでも原発を続けるのか—日本弁護士連合会編『検証原発労働』岩波ブックレット、二〇一二年、四五頁)

原発被曝労働者の場合は、被曝すること自体が労働の本質でありノルマですらある。原子力産業はある一定の人数の労働者が死んでいくことを前提にして存在する。労働者の使い捨てによって成立しているといっても過言ではない。被曝労働者は、生きていくかぎり発病の恐怖の中で無権利状態に放置され、その実態はあたかも現代社会の恥部であるかのごとく闇の中に隠されている。労働者の被曝による利益が、もしあるとするならば、それは労働者ではなく、会社側にある。原発が国策に従って推進されているのであれば、その利益はもっぱら国家が享受することになる。ある行為の受益者と犠牲者とが人格的に分離していることは、近代の一つの文明的な特徴でもあり、また伝統的な奴隷労働の形態とも一致する（藤田祐幸『知られざる原発被曝労働―ある青年の死を追って』岩波ブックレット、一九九六年、六一〜六二頁）

このような現実を改善することなしに当事者たちによって原発が運転されてきたならば、それはもはや犯罪的行為である。また、このような現実を知りながら私たちが原発を利用しているのであれば、それは余りにも非倫理的ではないか。現代社会の繁栄が、一

部の人たちの不当な犠牲によってはじめて可能であるのであれば、それはもはや「幻の繁栄」にしか過ぎない。全体の繁栄のために個が犠牲にならなくてはならぬ理由が、いったい、どこにあるのか。もしも原発によってこの国の繁栄があるのであれば、それは余りにも非倫理的な繁栄である。そのような繁栄を享受する権利が、この民主主義の時代に、いったい、誰にあるのだろうか。

しかし、このような「犠牲や差別から社会の繁栄が成り立つ」という構造は、既に公害時代からあった。例えば水俣病の権威である原田正純は次のように述べている。

私にとって、水俣病をつうじてみた世界は、人間の社会的なかに巣くっている抜きさしならぬ亀裂、差別の構造であった。そして私自身、その人を人と思わない状況の存在に慣れ、その差別の構造のなかで、みずからがどこに身を置いているのかもみえた。結論として、水俣病をおこした真の原因は、その人を人と思わない状況（差別）であり、被害を拡大し、いまだにその救済を怠っているのも、人を人と思わない人間差別にあることがみえてきた。（中略）水俣はまさに鏡である。そこに映しみることは世界を映すことになる。いまほど水俣を見る必要があるときはない（原田正純『水俣が映す世界』日本評論社、

一部の人々、そして多くの場合その人々は社会的弱者であるのだが、そのような一部の人々の犠牲（そこには差別も存在する）を「不可欠」として繁栄する社会。そのような社会を私たちが「是」とするならば、それはファシズムにも通じる高慢で無責任で馬鹿げた考である。原発問題の源は公害問題に既に存在した。「人を人とも思わない状況」を許してまで、私たちは経済的繁栄を享受してはならない。日常的な被曝労働者問題が解決されることなく原発を運転することは、余りにも非倫理的な行為である。

五. 他者の犠牲を必要とする者が無責任であるという構造

ところが、このような原発問題に対して、多くの者が無責任で通している。原発問題に関する「無責任の体系」がこの国に見られる。ここで、前述の③に関して述べたい。まずは、以下に、そのような無責任振りへの指摘を挙げる。

★原発当事者達の無責任

今回の原発震災で明らかになったことは、原発運転の当事者である電力会社も、監督官庁である原子力安全・保安院も、原子力安全委員会も、原子力推進の学者たちも、自分たちのこれまでの言動に責任も、反省も、方針転換も望めない無能力、無責任、無気力の人間たちであったという真実だ。シロをクロとっていくるめようとするだけでなく、自分がシロといい、クロといったことさえ忘れたり、あるいは忘れたふりをする連中なのだ（川村湊『原発と原爆』河出書房新社、二〇一一年、一三二頁）

“ 原発ジプシー ”（この言葉は、堀江邦夫の『原発ジプシー』に拠っている）といわれている原発で底辺での労働者が被曝に晒され、放射能障害に苦しみ、それでも貧しさのために働かなければならないのは、都市の人間が暖衣飽食し、贅沢三味の暮らしを送っているからではない。私たちと、私たちの社会は、本来そうした原子力発電の犠牲者などを求めてなどいない。原子力産業、原子力ビジネスで利益を得ている「原子力マフィア」と称すべき人間たちが、そうした犠牲者を生み出し、それがあたかも、電力の消費者が「悪」であるかのように責任を転

嫁しているだけだ。原子力や原発が犠牲を生み出しているのは、それが本来、そうした“生贖”^{（いせきどく）}を捧げなければならないほど、貧しく、劣った科学技術だからだ。それにあくまでも固執する一部の「原子力マフィア」によって、真実は歪められ、現実はいはれぬ湖とされ糊塗され、私たちはその怪物たちの欲望に犠牲の子羊たちをひれ伏して捧げるといふ愚行を繰り返している（川村、同書、一八三〜一八四頁）

日本が戦後、原子力研究を始めるにあたって、激論のすえ合意されたのが民主・自主・公開の三つの大原則でした。しかし、業界と行政と学者が一体になった「原子力村」とよばれる閉鎖構造ができて、情報の公開はほとんどされていません。原子力に不安を感じ、どうなっているか調べようとしても、行政の厚い壁にさまたげられます。そんな経験をした人たちはかぞえきれません。商業機密や核物質防護という名目で非公開の範囲が拡大されるのも、しよつちゆうです（原子力情報室『検証 東電原発トラブル隠し』岩波ブックレット、二〇〇二年、六五〜六六頁）

現代の科学は、細分化されすぎたように思います。科学者は

自分のかかわる分野のことにしか関心を持たず、そしてその分野だけが科学だと思ってしまうのです。日本の科学者は、狭苦しい研究室で「己見の狭い」学問を続けているのです。中でも原子力の世界は、自分の専門分野にしがみついて、きちんと責任を取らない人が大半を占めます（小出、前掲『この国は原発事故から何を学んだのか』、一六四頁）

★司法の無責任

忘れてはならないのは、司法の責任である。安全性への疑問から運転差し止めなどを求めて起こされてきた原発訴訟で、原告側が勝訴したのは三五件中二件しかなく、その二件も上級審でくつがえされた。圧倒的に国寄り、行政寄りの判決が出されてきたのだが、福島原発事故で過去の判決の妥当性があらためて疑問に付されている（高橋、前掲書、八八頁）

★マスメディア・ジャーナリズムの無責任

経産省等の下に組織された無数の委員会や審議会の役職を務め、巨額の研究費を電力会社から提供されることで国策に取り込まれてきた学者たちには、「原発安全神話」は成り立たなかった。広告費欲しさに「安全」宣伝を垂れ流し、批判的

なスタンスの学者・ジャーナリストを排除してきた、テレビなどマスメディアの罪も同断である（高橋、前掲書、三四頁）

地震と共存できる文化の創造に寄与すべき科学者たちは、多くは没社会的であるのみならず、とくに最近では政・官・財界に完全に取り込まれてしまっていて、市民から離れているようです。（中略）科学者と市民との間に立つジャーナリズムにも批判精神が希薄です（石橋克彦『原発震災 警鐘の軌跡』七つ森書館、二〇一二年、二〇〇～二〇一頁）

★都市部住民の無責任

電力を享受してきた都市部の一般市民の責任とはどういうものなのだろうか。一つには、知ろうと思えば知ることができた情報がありながら、原発のリスク、言い換えれば、そこに組み込まれた犠牲とその可能性について十分に考えてこなかった、甘く見ていた、無関心であったことについての責任があると考えられる（高橋、前掲書、一〇〇頁）

★国民の無責任

私が生まれたのは一九五六年、ちょうど日本が高度経済成長

期へと向かう時期でした。今回の出来事、とくに原発事故の成り行きを目にしたときまず頭に浮かんだ言葉、それは「加担」という事柄でした。（中略）私たちの世代は、「開発世代」という表現が最もふさわしいのかもしれない。しかし、私たちの世代はまた、開発がもたらす負の側面（公害や環境破壊の深刻化、引用者）についても教育の場で教え込まれた最初の世代でもありました。（中略）にもかかわらず、私たちの世代は、今日の事態を招く一連の開発を確かに受け入れ、またそれを押し進めてきました。もちろん中には、いち早く問題に気づき、異論を唱え続けた人びともいました。しかし、総体としてみると、私たちの世代が「加担」の構造の中心にいたことは否定できません。なぜ、このような結果を招いてしまったのか。とりわけ、その問題性を始めから確認する機会がありながら、しかし結局、今回の原発事故に至る道のりに歯止めをかけることのできなかつた世代の加担責任は、きわめて重たいものと感じざるを得ません。「人間中心」主義によって支えられた素朴な欲望の承認や「生活」重視の理想を免罪符としながら、最終的には際限のない成長や発展を受け入れてしまう心性をどのように精算していったらよいか（町村敬志「出来事の重みから考える」今福龍太・鶴飼哲『津波の後の第一講』岩波書店、二

まずは、「原発当事者」である、政府、電力会社、原子力産業研究者たち「原子カムラ」と呼ばれる人々の無責任振りを私たちは批判しなくてはならないだろう。だが、原子力の研究者たちの全てが無責任というわけではない。しかし、批判勢力が置かれた現状に対して間宮陽介は次のように指摘する。

原子力のような問題の多い技術に関しては、その必要性、功罪、あるいは事故の可能性を多角的に見ることがとりわけ要請される。原子力を推進する勢力に対しては、批判する勢力が存在し、しかも後者には前者と渡り合えるだけの地位が保障されていなければならない。しかし原子力研究においては批判者は大学を去ることを余儀なくされるか、大学にとどまることができたとしても、多くの者が助教より上に上がることができない（間宮陽介「大震災後に感じたいいくつかの感想と若干の提言」伊藤滋・奥野正寛・大西隆・花崎正晴編『東日本大震災復興への提言』東京大学出版会、二〇一二年、四四頁）

苟も学問を名乗る世界が、このような状況であることは許されな

い。学問の使命の一つは「現状批判」であり、批判こそが誤った現状を正すための第一の方法ではないか（ちなみに、本稿で何度も引用した小出裕章は、京都大学の「助教」である）。また、高橋らが指摘する、司法やマスメディア・ジャーナリズムの無責任振りも忘れてはならない。『犠牲のシステム』で高橋が指摘する無責任振りの糾弾は、主に、このような、社会的に大きな責任がある人々に集中する。私たちが今回の東日本大震災を契機として告発すべき無責任は、当然、このような人々にまず向けられるべきだろう。

しかし、ここで最後に引用した、町村敬志の指摘する「国民の無責任」は、私たち自身の問題である。政府や東電を非難する私たち自身の無責任振りを省みなくてはならないのだ。

本稿の筆者である私は、偶然にも町村と同じ一九五六年生まれである。振り返れば私もまた、町村が述べるように「開発がもたらす負の側面についても教育の場で教え込まれた最初の世代」である。しかし若い時代の私は、このような「開発がもたらす負の側面」を単に学校内での知識として受け止めたのみで、社会に何かを訴えようとした経験はない。「教科書での知識」は、所詮、「他人事」でしかなかつたのだ。このような反省をもとに、いま私は、遅ればせながらも「開発がもたらす負の側面」を真摯に社会に訴えなくてはならないと強く感じている。

六、犠牲と責任

さて、ここでこれまでの論を、より簡潔にまとめよう。原発が成立する背景には次のような構造がある。

◎原発は、一部の人々の「犠牲」があつて、はじめて存在可能である。しかし、その犠牲の不当性に対する「責任」を、原発による利益を享受する多くの者たちは取つてはいない。

私はここで「人は、全ての犠牲に対する責任を取らなくてはならない」と性急に訴えるつもりはない。なぜならば、例えば、人は多くの動植物を殺し食へるという犠牲の上で生きざるを得ないからである。これら動植物に対して人が「全ての責任」を取ることは不可能だろう。私たちは、常に何らかの犠牲者たちのお陰で生きているのだ。しかし、だからと言って「全ての犠牲は、やむを得ないのだ」と極言してはならぬ。「不当な犠牲」を極力排除することこそが倫理的な行為であろう。

まず、本稿で論じた、原発内部での被曝労働者の犠牲は「不当な犠牲」である。原発が日常的にこのような労働者の犠牲の上で運

されていることを知ったとき、私たちは「それはやむを得ない」と堂々と言うことが出来るだろうか。このような現状が改められない限り、私たちは「原発には反対である」と発言するのが筋ではなからうか。また、そのような発言こそが、原発による利益を享受してきた私たちの、被曝労働者の方々に対する責任である。

さらに、原発立地住民に対して。先に高橋の発言を引用したように「大事故と補助金との『等価交換』は、成り立つてはいけない取引である。今回の東日本大震災における「原発震災」はそれを如実に示している。このような取引を容認した私たちは、原発立地住民の方々に対しても責任がある。

また、原発事故の収束のために、正に「必死」に働いた人々の犠牲を「フクシマ五〇」等と賞賛する行為も慎まねばならぬ。一旦原発で大事故が発生した場合は、放射能による危険性が格段に高いために、他の事故と比較して莫大なリスクがある。「だからこそ、そのような英雄的な行為を賞賛するのだ」と簡単に言つてはならない。「英雄視しなければ収まらないほどの事故収束行動が必要だ」という原発の構造そのものを問題にしなくてはならないのだ。そして、そのような私たちの行為こそが、今回の原発震災の収束のために犠牲的精神を持つて必死になって働いた方々への責任であると私は考える。

一方、原発当事者たちの今回の原発震災に対する無責任振りには目を覆うものがある。彼らの取った態度は、正に「人を人とも思わぬ」態度である。このような人々がこの国の原発事業の中心に位置していたという事実は、「恥」以外の何ものでもない。

私は、「不当な犠牲」に対しては責任を取らなくてはならないと考える。その責任の取り方の最初は、そのような犠牲に対して当事者が責任を取ることである。その際の責任の取り方は、まずは犠牲者への陳謝とその後の生活保障の確立であり、次は、そのような不当な犠牲を排除するように努めることであろう。「偉大な犠牲の上で云々」という物言いは間違っている。犠牲を出さなければ成立しないという構造そのものの改革が、いま、求められているのだ。

七. 犠牲と繁栄

思えば、現在の私たちの「豊かさによる繁栄」は、多くの犠牲の上に成り立っている。さらに、その犠牲者の大方は、社会的弱者と呼ばれる人々である。原発内部での被曝労働者は、何も好きでその仕事に就いているわけではない。そのような仕事に就かざるを得ない事情があるからだ。また、原発立地住民も、好きで原発を誘致しているわけではない。誘致せざるを得ない事情があったからだ。そ

のような事情とは、やはり経済的な格差に依るところが大である。このような事情を思うとき、私は、現在のこの国が繁栄する「構造」そのものを真摯に見極め、変えなくてはならないと思う。一部の人々の不当な犠牲の上にはじめて成り立つ繁栄とは「幻」であり、そのような繁栄それ自体が「不当」である。

さらに思えば、この国の繁栄を支えるものは原発だけではない。多くの企業で不当に安い賃金で働かざるを得ない派遣労働者の存在。いつまでたっても正社員になることが出来ず、上司に文句を言えば簡単に誡首されてしまう立場の若者たちの存在。もしも、彼ら彼女らの犠牲の上でしかこの国の繁栄がないのであれば、もはや、そのような繁栄とは決別すべきではないか。そして、経済的な繁栄を第一とするのではなく、新たな理念の上に築かれた社会作りを私たちは目指すべきである。

そのような新たな社会の一つの指針として、広井良典は「定常型社会」という概念を提唱している。

「定常型社会」とは、さしあたり単純に述べるならば、「(経済)成長」ということを絶対的な目標としなくとも十分な豊かさを実践されていく社会ということであり、「ゼロ成長」社会といってもよい。これからの日本社会の本質は、まずもってこ

の「定常型社会」ということに集約されると筆者は考えている。(中略) 定常型社会というと、“変化のない退屈な社会”という印象をもつ人がいるかもしれないが、それは誤りである。「定常型」とはいわば物質的な富の総和が一定というだけで、たとえばCDの売り上げ総量が一定であってもヒットチャートの自身はどんどん変わっていくように、「質」的な変化は内包されている。要は「豊かさ」の再定義の問題なのである。もちろん、これからの時代は「変化しないもの(たとえば自然、伝統など)」にも価値が置かれていく時代である、ということも確認しておきたいが(広井良典『定常型社会』岩波新書、二〇〇一年、i~iii頁)

この部分の引用だけでは、かなり抽象的であり、「定常型社会」の詳細は分かりにくい。しかし、「定常型社会」とは『ゼロ成長社会』であり、『豊かさ』を再定義する社会であることは分かる。現在の私たちの「豊かさ」が、一部の人々の不当な犠牲の上で実現されたものであるならば、それは真の「豊かさ」ではない。真の「豊かさ」とは、不当な犠牲を排した、より倫理的なものでなくてはならぬ。「経済成長」もまた然りであろう。一部の人々を不当に犠牲にして獲得した繁栄を私たちが享受してはならない。広井が提

唱する『豊かさ』の再定義を行うためには、社会的公平の原則を確立し、不当な犠牲を排除し、全ての国民の安全な暮らしを第一とした社会の実現を、まずは願わなくてはならない。

八. おわりに

ここまで書くと、「お前の言っていることは理想論だ。国益を考えよ。原発無くしてこの国の発展は無いのだ」、「原発労働者は原発を廃止すると職が無くなるではないか」などの声が私には聞こえてくる。しかし、それでも私は原発を訴えたい。そして、一部の人々の不当な犠牲に対して責任を取ることなしに繁栄を求める、この国の構造自体を見直すべきであると訴えたい。それこそが、東日本大震災を契機として私たちが取るべき「原発責任」であると考えるからだ。

(たかぎ てつや 富山県立上市高等学校・教諭)